皇軍輜重の眞價を發揮したるものである。

噫聖戰の初期此忠誠勇武の士を喪ふ眞に痛惜禁ずる能はざる所である。然れども是れ東洋永遠の平和の爲尊き人柱にして假令骨を北支戰場に埋むとも氏の遺勳は永く皇軍戰史に輝きて不朽の芳名を留め其英靈は護國の神と仰がれ其靈德は尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の前途に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　池田義高

猛火を冒して彈藥を補給せる輜重の華

氏は福岡縣企救郡曾根町の人にして父を官太郎と云ひ大正四年三月三日の生れで未だ獨身であつた。性質溫良篤實にして責任觀念に富んで居た。昭和三年曾根高等小學校を卒業後家業に精勵し後小倉造兵廠に勤務して居た。

昭和十二年支那事變勃發するや輜重兵特務兵として七月二十七日應召し石田部隊に屬せられ勇躍北支方面の征途に就いた。北支に到着するや稀有の豪雨に至る處出水し道路は泥濘馬脚車輪を沒し其間に於ける輜重の急速なる彈藥輸送補充は名狀すべからざる困難があつた。當時氏は馭兵として連日連夜夫れ等萬難を克服して克く其任を果した。殊に九月九日の如きは午後一時天狗院附近に於て甚だしき泥濘惡路に戰友の輓馬は車輛諸共泥中深く沈下して行動全く不能に陷つた。此の時氏は班長の命を待つ事なく其泥濘中に飛び込み全身泥まみれとなり率先馬匹を救助し積載彈藥を搬出し車輛を引上げ以て其の全きを得しめた。

斯くて九月十四日永定河戰鬪に際し氏は本田中尉の指揮する先遣輜重中隊第二小隊第四分隊第十六班の彈藥車馭兵として之に參加した。當時所屬隊は梁各莊附近に陣地を占領しある野戰重砲隊陣地に直接彈藥補充を命ぜられ午後零時三十分梁各莊に到着した。當時我第一線歩兵部隊は敵前渡河を行はんとして同地に待機中であり野戰重砲隊は梁各莊東南の道路上に放列を敷き午後二時よりの砲擊開始の爲準備中であつた。斯くて午後二時三十分我が第一線は總攻擊を開始し野戰重砲隊は一齊に火蓋を切つたが氏亦我陣地附近に猛射を加へ來り我が軍の損害も逐次增加する狀態となつた。氏の所屬中隊は野戰重砲隊各大隊の陣地に次で直接彈藥を交付すべく敵の彈雨を冒して急進した。氏の分隊は同砲兵隊第三中隊の陣地直後に於て彈藥補給をなさんが爲前進するや敵彈盛に落下炸裂し馬匹は狂奔し馭兵の困難と危險は名狀し難きものがあつたが氏は重砲隊彈藥に支障なからしめん事を憂慮して狂奔する馬匹を巧みに馭し特に途中太平莊方向より猛烈なる敵彈を受けしも自若として尙も續いて放列線へと前進を續けた。然るに放列線近くに於て惜しくも腹部に貫通銃創を受けた。然かし剛勇なる氏は屈せず輓馬の韁を放すことなく倒れては立ち、立ちては倒るゝ事幾度なりしか終に腹背の出血多量の爲其の任務に堪えざるを自覺するや責任觀念旺盛なる氏は戰友に自己搬送の彈藥交付と愛馬を依賴して倒れた。氏は直ちに紅心庄收容所に收容され更に蔡指揮營野戰病院に入院篤き手當を受けたが其効なく間もなく名譽の戰死を遂げ北支の華と散つた。

氏が猛烈なる砲火を冒して戰線に彈藥交付を爲すに當り勇奮殪れて後止むの行動は一般戰友に深き感銘を與へて其の志氣を振作し危險なる放列補給を迅速ならしめ以て砲兵隊をして機宜に適する戰鬪威力を最高度に發揮せしめ先進輜重の重責を完遂させるに至つた。あゝ駄馬を誘導して放列陣地の直後に進出す、其委や必ずしも華かではない。然れども第一線兵種の爲有らゆる苦難を克服し猛烈なる敵の彈雨を冒して第一線の戰鬪力を增養せる其勞苦其協力に至りては獨り當時の砲兵隊が絶大なる感謝を捧ぐるに止まるものではない。今や忠烈にして至誠天地に通ずる氏が壯容に接する能はずと雖も氏の功績は皇軍戰史を飾り一般軍人の模範と仰がれて芳名を千載に傳ふべく其不滅の英靈は護國の神と祀られ尙も皇國及一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　橋本包平

至誠任務に邁往して敵彈に殪れたる自動車運轉手

氏は山梨縣北巨摩郡龍岡村の人にして亡父を朝吉母をことと云ひ大正三年二月十七日の生れで未だ獨身であつた。性質明朗眞面目にして進取積極的氣慨を有し又孝心厚く人情深い青年であつた。昭和三年三月龍岡尋常高等小學校高等科を卒業し農業補習學校に入學同八年三月卒業した。

昭和九年十二月特務兵として東京輜重兵第一大隊に入隊し二ケ月の教育を受け除隊し同年十月上諏訪町サイレン自動車商會に入り自動車運轉手として勤務して居た。

昭和十二年支那事變起るや八月應召今田隊に屬せられ勇躍中支方面の征途に就いた。中支上陸後は自動貨車運轉手として活躍したが九月九日より吳淞鎭に待機間は各種彈藥を船舶より野戰砲兵廠に輸送集積せるを初めとし其他各種の輸送業務に從事し其間泥濘の惡道に惱まされつゝも克く晝夜奮勵戰鬪準備に遺憾なからしめた。

次いで十月五日より實施せられたる大場鎭附近の戰鬪に於ては攻城重砲兵隊に配屬せられ自動貨車運轉手として敵彈下を冒して碩家宅北側陣地に戰砲隊の兵器彈藥を輸送し更に碩家宅南側及陳宅東北側附近に陣地變換の爲活躍し又揚行鎭より砲側に至る彈藥及び糧食の搬送其他戰鬪行動に必要なる部隊の運輸業務に從事し以て重砲隊の陣地占領及戰鬪諸準備に遺憾なからしめた。

十月二十七日は吉野工兵部隊の架橋材料を唐橋より楊木橋へ運搬を命ぜられたが氏は連日の疲勞と危險とを顧みず喜んで之に從事した。氏は其夜鄕里に手紙を書き送りし如く氏の自動車には數發の敵彈命中し其中一發は正面の硝子を破つて飛來したが怪我もなく元氣で斯樣にお國の爲働けるのも皆樣の御祈り添ひでと感謝して居た。

氏の敬虔にして豐かなる心境が此一事からも察知し得られやうと思ふ。

十月二十八日蘇州河附近の戰鬪に於ては砲兵大隊長小笠原少佐の指揮に屬し自動貨車第十號運轉手として之に參加した。當日午前八時陳宅東側陣地を出發蘇州河附近の戰鬪に參加の目的を以て大場鎭楊木橋に向ひ前進し王家宅西側橋梁補修作業の完成を待つ爲九王廟附近に於て敵銃砲彈の中に待機して居た。然るに午前十一時三十分頃不幸にも左側胸部に盲

貫銃創を受け竟に壯烈なる戰死を遂げた。氏が敵彈に殪るゝや望月砲兵准尉は直に駈けつけて抱き上げ氏に向ひ何か言ひ殘す事はないかと情けある言葉をかけると目を開き笑をふくみて氣息奄々たる中に幽かにも君が代を歌ひ最後に望月准尉殿！　と呼びかけ心靜かに瞑目したとの事であつた。

氏や性明朗にして盡忠報國の至誠に燃ゆ。一度聖戰に參加するや如何なる艱難辛苦にもひるまず如何なる慘烈なる戰況下にも動ぜず愛車を操縱して一意任務に邁進し竟に聖戰の人柱となつた。而かも從容死に就く正に武人の最後を飾るものであつた。今や其人亡しと雖も氏の功績たるや皇軍戰史に牢記せられて芳名を千載に殘し不滅の英靈は護國の神と仰がれ尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　西村三郎

險難の陸路に大敵と會し皇軍輜重の面目を完うして玉碎す

氏は京都市上京區紫町西南町の人にして亡父を儀三郎母を榮と稱し明治四十三年一月十八日を以て生れ未だ獨身であつた。大正十一年三月京都府女子師範學校附屬小學校を卒業し爾後家庭に在つて父母の手助けをして居つた。昭和五年十二月特務兵として輜重兵第十六大隊に入營し二ケ月の軍隊教育を受け除隊となつた。資性溫厚眞摯尊皇の心殊に厚く朝夕東方皇城を遙拜し又就寢時には　御尊影を拜して御禮を申述べ大演習等にて　至尊行幸の際は何時も　行在所方面に向つて遙拜し其の御安泰を祈り奉るといふ敬虔な心を有し四隣皆氏を嘆賞して居つた。從つて氏は品行方正犧牲的精神に富み多年鄕里の在鄕軍人分會役員として會務に盡瘁し後進の誘掖に努め更に又公益事業に對しても一身を犧牲にして盡力し家庭に在りても亦一家の柱石として母に孝養を盡し弟妹を愛撫し家業に精勵し現代稀に見る模範青年であつた。

昭和十二年七月支那事變の勃發するや氏は八月初旬應召加藤部隊に屬し勇躍北支方面の征途に就いた。斯くて北支上陸後は九月十四日まで輸送其他の諸勤務に服し九月十五日より涿州保定の會戰及び同月二十八日よりの石家莊、滦陽河附近に於ける會戰には中隊長藤本中尉の指揮下に第一小隊馭兵として之に參加し時には泥濘の地帶に惱み幾回となく不安の河川を徒涉し不眠不休連日連夜の强行軍を行つたが氏は克く困苦缺乏に堪へ常に重責に邁進し馬匹を愛護し荷物の保全に努め以て彈藥補給の主任務遂行に遺憾なからしめた。次で十月十三日より太原方面への轉進に方りては左縱隊配屬輜重輜秣中隊の馭兵として險峻なる幾多の難路を突破し礫石の水流を跋涉し又所在の敗殘兵を警戒しつゝ不眠不休の努力を以て追及是れ努め以て第一線部隊への給養を圓滑ならしめた。是れ全く皇軍輜重にして初めて成し遂げ得たる所にして所屬中隊は時の軍司令官より感狀を附與せられた。

其後左縱隊は敵の退路遮斷の目的を以て石門口附近に前進する事となつた。所屬小隊は十月二十一日石家莊にて糧秣を積載出發し途中南障城に於て左縱隊の第一線部隊に之を交付したる後中隊主力に分れ小隊長土肥少尉の指揮を以て微水鎭に至り更に糧秣を積載し再び中隊主力に追及の爲前進した。偶々同月廿六日午後零時三十分七亘村西方の急坂路にさしか

丶つた。あゝ左側は數十丈の斷崖溪流に面し右側は又千仞の谷で前方は殆ど爪先上りの急坂路をなしありて所屬小隊の不安たるや察するに餘ある次第であつた。然るに此時前に約一大隊左後方の稜線に約二三中隊右方の稜線に約一大隊の敗殘兵忽然として現はれ小隊目がけて亂射亂擊を浴びせて來た。哀れや駄馬は迫擊砲彈や機關銃彈の飛來炸裂に驚きて狂奔し或は急坂を駈け登るもの或は斷崖に顚落するものも尠くなかつた。氏は愛馬を鎭靜させつゝ岩蔭に繫ぎ又斃馬の荷物を處理して馭兵の本分を全うした。而して小隊は絶體絶命の場合とて二十名内外の自衛隊を以て目に餘る大敵に對し押し寄せ來る敵を死力を盡して防戰して居た。あゝ彼方の岩上に又此方の溪谷に擊つ斬る刺すの慘烈極まる修羅場を現出したのである。味方は衆寡敵せず敵は新手を替へて雪崩込んで來る。味方は次第に死傷者を增す許り竟に馭兵も拔劍隊となり群がる敵中に突入して武人の最期を全うせんとの悲壯の決意。敵彈益々熾烈を極め岩石の飛散も物凄く脚下に炸裂する砲彈の中を氏は飛燕の如く敵中に突入して敵兵二三名を刺殺し獅子奮迅と勇戰中不幸敵の投げつけたる手榴彈炸裂の爲頭部胸部に爆創を受け打倒れた。氏は全身血だるまとなり再び起たんとしたが力及ばず戰友と折重つて壯烈なる戰死を遂げた。時正に午後一時五十分頃であつた。所屬小隊は氏等の尊き犧牲に依り約四時間半の長時に亘り敵を拒止し遂に優勢なる敵を擊退する事を得た。

氏や夙に盡忠報國の志厚く一度び聖戰に臨むや難局に處して志氣益々旺盛愈々凄慘極まる血戰に處するや沈着剛膽馭兵の本分を全うしたる後渾身の勇を鼓して戰鬪を續け竟に武人の面目を全うして玉碎した。壯烈眞に鬼神を哭かしめ皇軍輜重の爲に萬丈の氣を吐いた。あゝ有らゆる不利なる情況下に此忠勇義烈の士を喪ふ眞に哀悼痛惜の情に堪えず。然れども人は一代名は末代である。氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に異彩を放ち其芳名は百世に傳へらるべく其英靈や不滅に生き護國の神と仰がれて其靈德は尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として尊き加護を垂るゝであらう。

因に氏の母は贈られし弔慰金に「守れ一彈祖國の爲に倒せ一彈正義の爲に」と血書を添へ尙「倖は今後護國の鬼として御國を護らせますと」の意を認めし手紙を陸軍大臣宛に送付されたとの事である。洵に此親にして此子ありの感を深からしめらるる次第である。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　堀江富一郎

忠誠なる輜重兵優勢なる敵の夜襲に奮鬪玉碎す

氏は茨城縣眞壁郡太田村の人にして父を繁藏母をらくと云ひ明治四十四年十二月二十二日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚篤實にして孝心深く又同輩に信にして村内の模範青年であつた。大正十五年三月太田尋常小學校を昭和八年三月太田青年學校を終了し同年六月一日特務兵として宇都宮輜重兵大隊に入隊二ヶ月の教育を受け歸休除隊し翌年四月太田村青年團理事に更に同十年五月には太田村第二消防組小頭に推された。

支那事變勃發するや八月應召小原部隊に屬せられ勇躍征途に就き北支に上陸した。北支到着後は息つく暇もなく永定河拒馬河、大橋河、保定の戰鬪に幾多の辛酸と危險とを冒し輜重として活躍大いに努め第一線部隊の戰鬪行動に支障なからしめた。而して敵は涿州保定の敗戰に依り著しく志氣を沮喪し石家莊附近の陣地に據つて皇軍を阻止せんとしたが脆くも石家莊も陷落し彰德附近の陣地線に於ては眞面目の抵抗を爲し得ずして黃河北岸に壓迫さるるに至つた。是れ皇軍の迅速果敢なる追擊と放膽なる作戰との結果であり之に伴ふ皇軍輜重の努力は實に絶讚に値するものがあつた。氏は其間終始一

貫默々として任務に邁進したが就中十一月九日中隊の臨漳大名に向ふ糧秣輸送に際しては人馬疲勞し敗殘兵所在に出沒する中を豪膽熱心に輸送業務に從事すると共に自衛警戒に任じ翌十日謝町附近に於て敗殘兵と衝突するや氏等の決死的奮鬪に依り敵を擊退し所屬隊を危地より免がれしむるを得た。

次いで十一月十三日正子頃磁縣城外に宿營中優勢なる敵正規軍は大擧夜襲して來た。氏は此の時第一小隊自衛隊列兵として敵の猛射を冒して第一線に躍り出で決死的の奮戰力鬪を續けたが午前零時三十分頃不幸敵彈の爲右大腿部に骨折貫通銃創を受けた。斯くて應急手當の上野戰病院に收容せられ厚き加療を受けたるも其效なく翌十四日午前七時三十分惜しくも護國の華と散つた。併し所屬隊は氏等の勇戰に依り其後敵を擊退するを得た。

自衛力乏しき輜重の而かも暗夜に於ける防戰を想起せば其苦戰實に言語に絶するものがある。而して本戰鬪に於ける氏の決死的勇敢なる行動は眞に軍人の模範となすべきものであつた。

氏鄕に在りては村の中堅として公に盡す所多く其將來を期待されて居たが更に聖戰に從ふや唯默々として死を鴻毛の輕きに比し職責の在る所水火尙辭せず滅私奉公の忠誠を致し竟に玉碎した。寔に痛惜を禁じ得ない次第である。然れども是東洋平和の爲の尊き犧牲にして其忠勇義烈は赫々たる武勳と共に聖戰史上に燦として輝き英靈亦護國の神として國民崇敬の的となり尙も皇國並に一家の前途に尊き佑助を垂るる事であらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　中林猿三

大敵に前路を遮斷せられ身を殺して彈藥を守る

氏は神戸市須磨區月見山本町の人にして大正三年一月二十三日生れである。亡父を金次郎母をたつと云ひ氏は未だ獨身であつた。責性溫良篤實小學校卒業後洗濯業者の弟子となり主家に忠勤を盡すこと七年同業組合長より雇傭人の模範として銀杯を授けられ表彰せられしことあり以て氏の性格の一般を察知し得やう。昭和二年三月尋常小學校を卒業し前記の如く他家に奉公し、昭和九年獨立して洗濯業を營み殊に母に孝にして亦兄弟にも友情厚かつた。

支那事變起るや昭和十二年八月末應召し加藤部隊に屬せられ勇躍征途に就いた。北支上陸後九月十五日より二十七日に亘る涿州保定の會戰には藤本部隊長の指揮に屬し晝夜兼行惡路行軍を續け其間終始馬匹を愛護し以て彈藥補給に遺憾なからしめた。次いで十月十三日より十一月三日に亘る太原攻略戰に於ては右縱隊配屬糧秣中隊の驅者として險峻なる難路を踏破し不眠不休其困難なる連絡補給に從事し克く其任を完うし爲に所屬輜重隊は全軍の模範として軍司令官より最も名譽なる感狀を授與せられたのである。

其後十二月三日氏の所屬隊は榆次附近に前進して敵の側背攻擊を任とする左追擊隊の配屬輜重として平定を出發し險峻なる山岳雜路を急進中未明所屬班の馱馬斷崖より轉落斃死せる爲め班長以下同班の十六名は中隊と別れ該馬積載の彈藥を敢容し中隊主力に追急中午後一時三十分廣陽村東方七百米の河原に達せしに突如追擊砲及重火器を有する優勢なる敵の攻

撃を受くるに至つた。玆に於て一同は速かに廣陽村に前進せし中隊主力に合せんとせしも既に敵の大部隊に其進路を遮斷せられ其の遂行は不可能であつた。該班の少數の自衛隊は敢然此敵に對し攻撃を開始せしが小銃機關銃迫撃砲の猛射に駄馬は狂奔し右往左往するの狀態であつた。氏は早くも先頭に立ち敵彈雨下する中を物ともせず愛馬を誘導して右方部落に牽き入れ直ちに銃を執り僅々八名の自衛隊に加はり敵に肉迫して力戰奮鬪敵を一時撃退せしも敵は再び反撃し來り其際氏は惜しくも頭部及顏面に手榴彈の爆創を受け壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。時に午後四時であつた。

氏は鄕に在るや永年主に仕へて堅忍忠勤實に店員の範となり。軍に從ひては補給の任に當り惡路險難を冒し不眠不休其勞苦を克服して任務を完うす。其氣力と精神とは常に一貫して變る所がなかつた。其隱れたる功績の如何に偉大なりしかは所屬隊が名譽の感狀を授けられたるに徵しても明かであらう。而して一度敵の急襲を受くるや腕に覺えもなかりし氏が猛然身を挺して大敵に迫る。是れ貴重の彈藥を保護すべき重責を痛感せる崇高なる精神の發露に外ならなかつた。夫れ職分の存する所自ら責任の伴ふあり。生を棄て責任を重んじ斃れて後已む是れ皇國軍人の精華であり氏の全靈であつた。たとへ血に染むるも敵をして一指だも彈藥に觸れしめざりし赫々の武勳は皇軍輜重の誇として千載に傳ふべきであらう。今や氏の英魂は護國の神として安らかに靖國の御社に鎭まることであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　村中介二

危險と疲勞困憊を制して器材を運搬し蘇州河の通過を繼續せしむ

氏は石川縣能美郡國府村字坪野の人にして實父を出口市太郎實母をそで養母も亦そでと稱し大正二年六月十四日を以て生れ後ち村中家の養子となり妻文子との間には未だ子寶を授けられて居なかつた。昭和二年三月鄕里の小學校を卒業し同九年二月現役兵として輜重兵第九大隊に入營し鞍工兵を命ぜられ三月二十八日歸休除隊となつた。

責性溫厚にして家業に精勵し村内模範青年として愛敬せられて居た。

支那事變勃發するや八月中旬金澤工兵隊に應召井口部隊に編入せられ中支方面の征途に就いた。斯くて中支上陸後氏の所屬小隊は天谷支隊に配屬せられ吳淞埠頭に位置し天谷支隊が九月十日より羅店鎭攻撃の爲敵前架橋を爲すや氏の小隊は架橋材料の運搬作業に從事したのであつた、此時氏は不眠不休終始敵銃砲彈の落下する地區を困苦と危險と戰つて克く其の任務を全うした。此の時に於ける氏の小隊の活動は誠に目覺ましきものあり松井中支方面最高指揮官より全軍の模範として感狀を授けられた程であつた、次で十月十九日氏の中隊は輜重隊長の指揮に屬し張宅に位置し劉家行攻撃の爲彈藥糧秣の輸送交附に任じたのであるが其任務は容易なものではなく一部は駄馬に據り陸路を一部は鐵舟に據り水路を何れも敵火の危險を冒し不眠不休で遂行したのである、此際氏は連日の疲勞困憊をも意とせず熱心勇敢に輸送業務に從事し又或時は鞍工兵として馬具の修理に從事する等只管所掌業務に支障なきを期したのであつた。

其後蘇州河の渡河戰に際し氏の中隊は十月二十九日工兵隊長の指揮に屬し右渡河作業隊に加はり敵彈雨下する裡に暗夜惡路と戰ひつゝ郁家宅西南方三百米の蘇州河渡河兵に架橋器材を運搬する事數回其の功績は偉大なるものがあつた。斯く

て十一月六日には西村伍長の指揮する混成分隊にあつて蘇州河軍橋補修材料の搬送を命ぜらるゝや連日の疲勞困憊にも拘らず而かも惡天候の爲甚しく破壞せる道路を自動車兵と協力し陳家灣にある器材を馬家宅東北一千米の地點に運搬し其整理集積を終り宿營地揚宅の東北端に達せし時不幸敵砲彈近くに炸裂し惜しくも壯烈なる戰死を遂げた。當時蘇州河の我軍橋は屢々敵砲彈の爲破壞せられ其都度多數の補修器材を要するので萬一補修器材不足し又は到着せざる間は其通行渡河は中止せらるゝので氏が戰死の當日も敵砲彈の爲破壞せられたのであつたが幸に氏等の搬送した器材の爲第一線部隊の渡河に支障を來さなかつたのは是れ實に氏等の尊き犧牲の賜であり其功績は拔群と謂ふべきであつた。

氏は輜重兵で第一線硝煙の間に奮戰格鬪する花々しきものではないが其部隊に又其身に攻擊兵器も有せずして敵彈の下殊には敗殘兵出沒する危險地域に有らゆる障害と困苦缺乏を克服しつゝ不眠不休の活動を續くる其事自體が勞苦に於て決して第一線將兵に劣るものではなく而かも其行動如何は戰勝を左右する極めて重大なるものである、眞に忠勇義烈崇高なる犧牲的精神に依て始めて遂行し得るので羅店鎭や劉家行の攻略將又蘇洲河渡戰の戰勝も氏等が堅忍不拔の犧牲的活動に俟つ所極めて大なる次第である。氏や江南の花と散りしと雖も其の赫々たる武勳活動は皇軍輜重の鑑として仰がるべく其英魂は不滅に生き護國の神として皇國を守護し遺族に祐を垂るゝであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進められ次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　村田不二雄

壯烈勇敢特務兵の範

氏は石川縣金澤市地黃煎町の人にして亡父を義三郎母をぎと云ひ大正五年五月三日に生れ未だ獨身であつた。資性寡言溫厚なるも事に臨み剛毅機敏にして雄辯僚友を御するの才があり衆の敬愛を受けてゐた。昭和五年六月家事の都合に依り石川縣男子師範附屬小學校高等科二年を中途にて退學し名古屋市に趣き陶器工場に入り畫工となつた。小學校時代は野球の選手として頗る活潑であつたが畫工となるや孜々矻々寸暇を惜みて精勵した。十八歳の折現役を志願したが家事の關係により斷念するの餘儀なきに至つた。昭和十一年徵兵檢査に甲種合格となるや「俺の現役中は屹度戰爭があるぞ俺の魂を捧げる秋が來るのだ」と氏の喜びは一通りでなかつた。斯くて翌十二年二月特務兵として金澤輜重兵聯隊に入營し約二ケ月軍隊教育を受け三月歸休除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年八月二十日井口工兵部隊に應召し同月二十九日勇躍待望の征途に就いた。中支に上陸するや指江隊第一分隊第三班員として天谷支隊に配屬せられ吳淞埠頭に露營し機の到るを待ちしが九月下旬所屬支隊が羅店鎭附近に於ける敵陣地攻擊に方り敵前架橋の爲器材運搬に從事せしめらるるや猛火を冒し果敢なる行動に依り所命の任務を果した。此勇敢なる小隊の行動は全軍の龜鑑として時の軍司令官より感狀を附與せられた。次いで十月九日劉家行附近の戰鬪に際し氏の所屬中隊は輜重隊長の指揮に屬し劉家行の後方千米の張宅に露營し彈藥糧秣の交付に從事し或は駄馬に依る陸路輸送に、或は携行鐵舟を以て水路輸送に、十月二十八日に至るまで連日不眠不休の活動を續けた。此間氏は常に率先彈雨を冒し辛酸を克服し萬難を排して補給を全うし第一線の戰鬪に支障なからしめた。其の功績は偉大なるものであつた。

十月二十九日所屬中隊は再び工兵中隊長の指揮に屬し陳家灣に露營し工兵隊右渡河作業隊の爲蘇州河架橋地點（郁家宅西南方三百米）に器材を交付すること數回此間暗夜惡路と闘ひ敵彈雨飛の下人知れぬ辛苦を重ねつゝ而かも勇敢に行動し毎回適時交付を完了し工兵隊の作業に些の滞滯をも生ぜしめなかつた。當時蘇州河の軍橋は連日に亘り敵彈の爲破壞せられ其都度多數の補修材料を要する狀態であつた。十一月六日も亦補修材料を推進するに方り氏は西村伍長の指揮する混成分隊の一員として之が運搬を命ぜるゝや惡天候の爲破損甚しき道路上を七時間餘に亘り奮闘努力以て陳家灣に殘置しある器材を馬家宅東北方一軒の地點に運搬し完全に集積整理を終り午後四時五十分頃宿營地北端に達せし時不幸敵砲彈落下炸裂し無念にも多數の砲彈破片を蒙り壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏が上海戰場に立つや前線と同樣敵の彈雨に曝されながら自らは戰はざるの任務に服し勃々たる勇心抑さへ難きを壓さへ只管後方勤務の重大なるを自覺しつつ或は勇敢彈雨を冒し或は堅忍惡路を制しあらゆる辛酸を克服し毎に隊員に率先精勵して此至難なる任務を完うし前線戰捷の因を爲した。夫れ職分の存する所第一線に奮闘すると後方に活躍するとに論なく身を君國に献げ斃れて後已む是れ軍人精神の精華である。氏の如きは正に光輝ある戰捷の蔭に默々として活躍せる勇士であつた。今や一身を献げて重任を完うし而かも彈巣となりて散華す。眞に痛惜に堪へず。然れども氏の赫々たる功勳と責任の範とは千載の下皇軍戰史に輝き其不滅の英魂は護國の神と仰がれ尚も皇國の前途に一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　矢野稔

敵の猛烈なる砲撃下に馬匹を擁護し守地を離れず

氏は愛媛縣越智郡宮窪村の人にして大正二年十月十二日生れである。父を初治母を歌野と云ひ養父新造養母オセンは共に既に沒し氏は未だ獨身であつた。資性質實勤勉の人にして親孝行であつた。昭和三年三月宮窪高等小學校を卒業し其後今井釀造部に入り續いて翌四年松永町鹽田に勤務し同十年大阪鐵工株式會社因島工場に入社し克く精勤してゐた。

支那事變勃發するや昭和十二年八月十八日應召山室部隊本部に屬し勇躍征途に就いた。召集當時氏は「自分は從來思ふやうな孝行も出來なかつたから戰爭に出て忠孝の道を盡す」と云ひて欣び勇んで門出したのであつた。

氏は○○部隊の參謀長の馬取扱兵として中支に上陸するや翌日敵彈下を急進○○司令部に追及し同日夜は張宅に入つたが終夜近距離より猛烈なる敵の砲火を受けた。翌二十九日司令部の周家村移動に伴ひ將校乘馬は沈家衖に至り爾後同地に於て乘馬と共に起居し其保護に任じたのである。第一線は戰果の擴張に努めしも敵の兵力過大且頑强に抵抗せし爲戰闘は容易に進捗しなかつた。即ち毎夜反覆敵の夜襲を受け之れを撃退する等連日激烈なる戰闘を繼續したのである。殊に敵線は西方千米内外にあり南方は鎮店鎮南端に近く東方は吳宅附近まで敵が攻撃し來ることありて司令部は連日連夜彼等間諜の連絡に因る敵銃砲の集中火を蒙り危險極めて大なる狀況であつた。然るに氏は少しも之れを意とすることなく且又極度の炎熱を物ともせず率先して其任務を盡して居たのであつた。

九月九日夜は敵の追擊砲及嘉定よりする長射程砲の射擊特に激しく司令部附近は數百發の砲彈を受けたが氏は依然沈着勇敢に乘馬を監視中午後十時三十分頃遺憾にも其一彈側近に落下炸裂し他の特務兵三名と共に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。

氏の如き勇敢沈着なる人を第一線に銃と劍とをとりて活躍せしめ得ざりしことは如何にも遺憾とする所であるが併し翻つて考ふるに凡そ軍の一員として任を受くるもの是れ皆　上御一人より授かりし尊き職分である。各々職責の重大なるを自覺し忠君愛國の大義に基き熱誠以て之を遂行する是れ君に忠なる所以であつて軍の戰捷亦之れに因つて求め得らるゝのである。即ち第一線に立つと立たざるとに何等の相違もないのである。氏が應召するに當り父母に遺せし言葉の如く實に氏は上陸以來彈雨の下從容自若馬取扱兵たるの職分に全力を傾注精勵したのであつた。責任觀念旺盛にして忠誠奉公の人にあらざれば爲し能はざる所である。氏は一般兵の如き軍隊教育を受けざりしにかくも立派に職分を果して斃れしは氏が平素の心構の程も察せられ敬虔の念に堪へざる次第である。氏今や沈家衛の華と散りて亡しと雖も氏が忠孝一途の精神と責任遂行の實績とは永く軍民の範として後世に傳ふべく氏が不滅の英魂は護國の神として皇國を加護すると共に氏が念願せる孝道は父祖の名を顯はし後世の骨肉眷族に清く尊き教訓を垂れ以て大孝を完成したが更に將來其多幸繁榮を加護するであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　前田榮一

傷つくも尚大敵と奮鬪し輸送彈藥を擁護せる輜重兵

氏は神戸市神戸區元町通の人にして亡父を清次郎母を花代と云ひ大正三年十月二十二日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚にして事に頗る勤勉であつた。昭和七年三月關西學院中學部を卒業し昭和十一年七月まで大阪市小西食料問屋に其後株式會社小西神戸商店に勤務し精勤してゐた。

支那事變起るや輜重兵第一補充兵として昭和十二年八月一日加藤部隊に應召同月二十二日勇躍征途に就いた。北支到着後九月十五日より二十七日に亘る涿州保定會戰間は糧秣輸送中隊の馭兵として又二十八日より十月十二日に亘る石家莊滏陽河附近の會戰間は彈藥輸送中隊として不眠不休晝夜難行軍を續け中隊をして彈藥糧秣の補充に遺憾なからしめ次いで十月十三日より十一月三日に亘る太原攻略戰に於ては右縱隊配屬彈藥輸送中隊として險峻なる難路を踏破し是亦不眠不休其困難なる連絡補充に從事し補給の大任を完うした。爲に氏の所屬輜重隊は時の軍司令官より感狀を附與せられた。

十一月三日には氏の中隊は榆次附近に前進して敵の側背攻撃を任とする右追撃隊配屬輜重として駄馬編成により平定を出發し險峻なる山岳雜路を戰鬪部隊に跟隨して急進し十一月四日午後一時三十分廣陽鎭南方に至るや突如迫撃砲及重火器を有する優勢なる敵より攻撃を受けた。此の時氏は馭兵として馬の遮蔽に努めしも高地より射撃する敵彈の爲愛馬は竟に斃され而かも敵の一部は身邊近く迫り來り氏は勇戰奮鬪彈丸雨飛の間傷ける戰友を扶けつゝ戰鬪を續けしが氏も亦間もなく敵彈の爲左足に受傷するに至つた。然し氏は屈せず尙も奮戰を續けしが更に頭部に貫通銃創を受け竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。時に午後六時であつた。

氏の戰場に赴くや唯々後方勤務の重大なるを自覺し不馴れの駄馬を馭しつゝ不眠不休惡路險難を冒しあらゆる辛酸を克服して其重任を完うす。其隱れたる而かも偉大なる功績は所屬隊が名譽の感狀を授與せられた事に徵しても明かである。而して氏が一度其の急襲を受くるや軍隊教育を受けざるにも拘はらず彈藥守護の一念鼓に迸り敢然身を挺して大敵と奮戰す而かも傷きて尙ほ屈せず其壯烈鬼神をも哭かしめ未教育補充兵の爲万丈の氣を吐くものがあつた。夫れ職分の存する所前線たると後方たるとを問はず身命を捧げ斃れて後已む是れ眞に皇軍の精華である。馬は死し身は斃るゝも我彈藥に敵をして一指だも觸れしめざりし赫々の武勳は皇軍輜重戰史の誇として千載に輝き芳名語り傳へて後世の鑑となり其不滅の英魂は護國の神と仰がれ其神靈は尙も皇國の前途を擁護し又一家の守護神として其將來に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は傷死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　宮本幸作

輜重の華、險難の地に包圍せられ勇戰の後悲壯の最期を遂ぐ

氏は大阪府三島郡豐川村の人にして父を辰三郎母をヌイと云ひ大正元年十二月二十一日の生れで未だ獨身であつた。性温厚にして父母に孝兄妹と相和し交際圓滿にして村内一同より敬愛せられて居た。大正十三年四月豐川尋常小學校を卒業し爾來家に在りて專ら農業に從事して居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召して加藤部隊に編入せられ勇躍征途に就いた。

北支戰線に到着するや九月中旬より涿州保定の會戰に馭兵として中隊長藤本中尉の指揮に屬し連日連夜雜行軍を續け以て彈藥の補給動務に從事した。次いで十月十三日より太原攻略戰に參加し藤本中尉の指揮下に左縱隊配屬輜重糧秣中隊馭兵として峻險なる難路を突破し屢々河川を徒涉し補給連絡等頗る困難なりしにも不拘之を克服して追撃部隊の爲貴重なる糧秣補給の任を果し其の結果所屬本隊は時の軍司令官より感狀を授與せられた。

斯くして所屬隊は十月二十一日石家莊にて時に糧秣を積載して出發し途中南障城に之を交付したる後中隊主力と分離し小隊長土肥少尉の指揮を以て微水鎭にて糧秣を補充し中隊主力に急追中偶々二十六日午後零時三十分娘子關附近の七亘村西方急坂を登攀中突如迫撃砲及重火器を有する優勢なる敵の攻撃を受けた。氏は直ちに敵彈熾烈なる中にありて先づ駄馬を七亘村部落内に誘導したる後敢然自衞隊に加はり奮戰力鬪竟に玉碎したが其詳細は藤本部隊長より寄せたる次の手紙に依り知ることが出來る。前略昭和十二年十月二十六日部隊は偶々重大なる使命を帶びて新たに足を山西に踏み入れ重疊せる山間を縫つて雜行軍を續け正午近く河北山西兩省境をなす娘子關附近の七亘村に到着しました。抑々山西省は山嶽に富

み古來屈强なる天然の要害として守るに易く攻むるに難い地であります。加之ならず皇軍の進擊甚だ急なる爲敵兵の敗走したるもの彼方此方に再び集結して以て我後方を攪亂するものが少くないのであります。當時前線に輸送すべき貴重の糧秣を馬背に滿載して行軍して居ました。（中略）行動中七亘村河原に於て慌しき晝食をとり再び前進を起しました。道は此處より再ひ山嶽に入り胸を衝くやうな斷崖路となります。此時自衛隊が前方岩蔭又洞穴に巣喰ふ敵の大部隊と衝突し小銃機關銃迫擊砲の掃射を受け左は數十丈の斷崖右は又覗く事も許さぬ深谷足許定らぬ石ころの隘路敵彈足許を掃ひ軍馬は悉く狂奔し斷崖登攀中溪中に轉倒するもの少からず急坂難路の事とて事故馬多く補助兵は殆んど斃れた馬の荷物を擔ぎ當初は二十名内外の自衛隊を以てすかさず三方より群がる敵に肉薄、終に馭兵をも拔劍隊として之に加へ岩上に於て或は溪谷に於て射つ刺す斬るの激戰を演じ更に押寄せる敵一大隊正面右に一大隊斜後方に二三中隊を相手に僅か五十名足らずの寡兵を以て約四時間半の激戰をしましたが此の時常に班の先頭に立つて沈着機敏班の模範として信頼を受けて居られた君は直ちに輜重の任務を感じ數多の軍馬狂奔する中を克く愛馬を宥めつゝ岩蔭に引き入れ直ちに拔劍敢然身を挺して敵中に突入せられたのであります。之を見た全軍の志氣益ゝ昂り我も我もと拔劍し敵中に悲壯な肉彈となつて突入したのであります。時に拔劍隊の先頭となつて群がる敵中に突入せる宮本君は間髪を容れず一名を刺し殺し返へす刄に第二の敵を倒し勇躍更に進擊せんとせし時左方の岸壁に潜みし敵の投げし手榴彈は轟然と爆發し無念や君の頭部に命中さしも豪氣の君も如

何せん其場に堂と倒れ無慘や溪谷に轉倒しました。折柄同じく倒れし戰友の手を取りて微かに　天皇陛下萬歳と聲を絞り折重つて竟に幽明界を異にせられたのであります。時正に午後一時五十分其最後たるや實に武人の華輜重の誇りと謂ふべく爲に戰友の士氣を鼓舞し延いては藤本部隊戰捷の因となつたのであります（後略）」

氏や溫厚篤實にして常に上官の信頼厚く又克く班員を和衷協力せしめ愛馬を勞はる事我が子に接する如くさて一度び戰場に起つや勇猛果敢に奮戰し眞に軍人の鑑と謂ふべき人柄であつた。斯る忠勇義烈の士を喪へるは眞に痛惜に堪えずと雖も氏の赫々たる遺勳は天晴れ皇軍戰史に輝き其名は語り傳へて千古に芳ばしく其英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ尚も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

支那事變

忠勇烈傳　陸軍之部　第二卷（終）

忠勇顯彰會趣意概歴

一、本會ハ我國軍人軍屬ニシテ明治三十七年以後ノ戰局ニ於テ忠勇義烈偉勳ヲ樹テ遂ニ國難ニ殉シ萬世ノ龜鑑トスヘキモノヲ顯彰シ其偉績ヲ不朽ニ傳ルコトヲ目的トスル社團法人ナリ

一、本會ハ明治三十七年五月故男爵九鬼隆一氏ノ主唱ニ依リ創立セラレ、皇族殿下ヲ總裁ニ推戴シ奉ル允許ヲ得、畏クモ明治三十八年四月十日ニハ　明治天皇皇后兩陛下ヨリ、昭和三年八月六日ニハ　今上陛下ヨリ御奬勵ノ思召ヲ以テ御下賜金ヲ拜受シ、又官界民間篤志家ノ賛助ヲ得今日ニ及ベルモノニシテ、其主ナル顯彰事業トシテハ忠勇列傳ヲ編纂シ各遺族ニ忠死セル愛子愛夫ノ戰場ニ於ケル偉績行動ヲ知ラシメ、又全國招魂社、主ナル圖書館教化團體官衙軍隊等ニモ寄贈シ、其忠烈ヲ不朽ニ傳ルト共ニ、國民精

神ノ教化作興ニ資シ、既ニ創立以來卅六年、此間日露戰役、青島戰役、西伯利亞出兵、歐洲大戰ニ於ケル地中海北海戰死者、第七十第四十三潛水艦殉難者、濟南事變、臺灣霧社事件、滿洲上海事變ノ忠死者列傳ハ夫々編纂寄贈ヲ終リ、今回更ニ陸海軍省其他篤志家ノ援助協力ノ下ニ支那事變忠死者ノ列傳編纂ニ着手セル次第ニシテ、今事變ニ於ケル忠死者總數ハ豫定シ難キモ本事變忠勇列傳ハ百數十卷ニ及フ見込ナリ。

一、現在本會總裁及役員ハ左ノ如シ。

忠勇顯彰會總裁及役員

總裁元帥陸軍大將大勳位　梨本宮守正王殿下

會頭　樞密顧問官　清水澄

常任幹事　陸軍少將　石坂弘毅

（イロハ順）

幹事

陸軍省人事局長陸軍少將　飯沼守

貴族院議員　稲畑勝太郎

海軍省人事局長海軍少將　伊藤整一

貴族院議員　德富猪一郎

貴族院議員陸軍中將　大島健一
貴族院議員　小倉正恒
宮中顧問官海軍中將子爵　小笠原長生
實業家　小畠元三郎
貴族院議員　小野耕一
陸軍大將　川島義之
樞密顧問官海軍大將　有馬良橘
樞密顧問官陸軍大將男爵　奈良武次
貴族院議員　永田秀次郎
實業家　下鄕傳平
樞密顧問官海軍大將男爵　鈴木貫太郎

評議員　（イロハ順）

陸軍中將　林彌三吉
著述家　神田正雄
陸軍中將　中村濱作
陸軍中將　中島虎吉
實業家　成富道正
海軍少將　向田金一
實業家　奥村安太郎
海軍中將　大湊直太郎
從四位勳三等　山岡國利
陸軍中將　佐藤清勝

陸軍省人事局恩賞課長
陸軍歩兵大佐　佐々眞之助
海軍省人事局第二課長海軍大佐　三戸壽

主査委員

（イロハ順）

（常任）海軍　大佐　猪瀬乙彦
陸軍歩兵大佐　内田保雄
（常任）陸軍砲兵大佐　澁川政雄

昭和十四年四月二日印刷
昭和十四年四月五日發行

（非賣品）

編輯兼發行者　東京市澁谷區穩田一丁目一〇一番地　社團法人　忠勇顯彰會
右代表者　澁川政雄

印刷者　東京市神田區三崎町二丁目十一番地　百目木智璉

印刷所　東京市神田區三崎町二丁目十一番地　株式會社共榮舍

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目一〇一番地　社團法人　忠勇顯彰會

版權所有

343
1

終